



Profile—坂田省吾

1990年、医学博士（広島大学）。1999～2000年までデューク大学客員教授。2005年より現職。2013～2015年まで国際比較心理学会 President。専門は生理心理学、時間心理学、比較心理学。著書は『心理学基礎実習マニュアル』（共編、北大路書房）、『パピーニの比較心理学』（分担共訳、北大路書房）など。

学生の頃から海外留学に憧れていました。いきなりの留学は無理だと考えていましたので、まずは国際心理学会（ICP）に参加することから始めました。1988年に第24回ICPがシドニーで開催され、初めて参加しました。ハーバードブリッジ、オペラハウスをはじめ、たいへん美しい街で親切にしてもらったことを覚えています。1992年には第25回ICPがブリュッセルであり、ヨーロッパに初めて足を踏み入れました。ビールが美味しかったです。1996年のICPモントリオール大会は留学を決意させる大会になりました。会場近くの地下鉄駅で大阪教育大学の石田雅人先生からパピーニを紹介されました。その頃いつかは国際比較心理学会（ISCP）を日本で開催したいと石田先生から熱い思いを聞きました。

ラットの時間知覚に興味があり、メックの論文を読んでいました。アイデアが一杯詰まった論文を次々と発表するメックを見て、いつかは彼と討論がしたいと

記念すべきミレニアム

広島大学大学院総合科学研究科 教授

坂田省吾（さかた しょうご）

願っていました。メックの名前を知った頃、彼はブラウン大学にいて、時間知覚ではたいへん有名なチャーチと一緒に、多くの実験をし、論文を発表していました。コロンビア大学に移ってからでも精力的に論文を出していました。まだ一度も会ったことがありませんでしたが、その後メックがデューク大学に移ったことを知り、留学をするならこの研究室と考えていました。1999年9月1日、遂に念願が叶ってメックのところに留学しました。

デューク大学は想像以上にすばらしい環境でした。メックのラボには北米のいろいろな大学から大学院生が集まっています。大学院生のリクルート制度についても初めて知りました。ラボには技官と動物の世話をするスタッフが揃っていて、日本の動物実験室から考えると夢のようなすばらしい環境でした。10台のスキナー箱を1台のパソコンで制御していました。メックの実験室は他にも2つあり、どちらも10台ずつのオペラント箱をMEDシステムで制御していました。非常に恵まれた環境で、実験に明け暮れました。現在の日本でも当たり前になっている研究倫理と実験室査察の制度も知りました。ランチボックスミーティングもいろいろな研究者の話をお聴きことができ、その後の研究に役立ちました。

2000年3月にアメリカ東部心理学会の大会がボルチモアであり、セッションに参加したときに後ろの席にモントリオールで会ったパ

ピーニが座っていました。久しぶりに再会して話をしたのですが、それがきっかけでISCPの学会誌であるIJCPの編集委員を頼まれました。その後、2002年にシカゴで開催されたISCPから、2年ごとに開催される大会に出席するようになりました。2004年のスペインのオビエドで開催された大会から運営委員になり、2006年クライストチャーチ、2008年ブエノスアイレスと参加して、2010年に淡路夢舞台で石田雅人先生を大会長としてISCPを開催しました。考えてもいませんでしたが、このときに学会長に選出されました。会長になってわかったことですが、ISCPではPresidentに選出されると最初の2年はElect、次の2年がPresident、そしてPast-President 2年の合計6年務めます。見習い、代表、顧問のような制度です。これは非常にいい制度だと思います。

留学をきっかけに知り合った若い研究者たちがみな活躍していることが、私の財産になりました。デューク大学ではスタッドン教授の研究会にも出席させてもらいました。一緒に実験をした大学院生のマテルは、今ではフィラデルフィアにあるヴィラノバ大学の教授になり、ラットを使った時間知覚の神経科学分野ではすばらしい論文を出し続けています。2015年9月には日本動物心理学会で講演をしてもらいました。

中古のボルボを飛ばし、マテルたちと東海岸で見たミレニアムの初日の出は忘れられません。夢のような時間でした。